

ISBN4-903353-05-2

漢文文法と訓読処理

— 編訳『文言文法』 —

二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム

## 目次

原序	vii
第一章 単語	
一 文字と単語	1
二 品詞	1
三 連綿語	5
四 兼詞	10
第二章 文と句	
一 主語、述語、目的語	17
二 連体修飾語、連用修飾語、補語	18
三 包摂文と埋め込み文	19
四 複文と節	20
五 句	21
第三章 名詞	
一 形容詞および動詞から転じた名詞	27
二 名詞の動詞用法	29
三 名詞の連用修飾語用法	32
四 時間詞と場所詞	35
五 量詞	42
第四章 代詞	
一 代詞の類別	48
二 人称代詞	48
三 指示代詞	55
四 疑問詞	62
第五章 動詞	
一 動詞の類別	69
二 意動用法と使動用法	70
三 動詞の省略	75
四 動詞相当句“奈何”“如何”	77
五 助動詞	78

第六章 形容詞	
一 性質、状態をあらわす形容詞の機能	79
二 形容詞相当句の前置と後置	80
三 数詞	81
第七章 副詞	
一 副詞の機能と類別	86
二 程度副詞	87
三 状態副詞	89
四 数量副詞	92
五 時間・場所副詞	93
六 否定副詞	93
七 表敬副詞	99
八 応対副詞	102
九 語気副詞	103
第八章 前置詞	
一 前置詞及びその目的語	106
二 前置詞構造の変則的用法	108
三 “於”の用法	110
四 “以”の用法	118
五 “為”の用法	123
六 “与”の用法	126
第九章 接続詞	
一 接続詞の類別	128
二 提起接続詞	128
三 並列接続詞	129
四 選択接続詞	133
五 順承接続詞	134
六 転折接続詞	137
七 譲歩接続詞と仮説接続詞	140
八 接続詞相当句	142
第十章 語気詞	
一 語気と語気詞	144
二 提示と停頓をあらわす語気詞	145

三	終結と肯定をあらわす	151
四	已然をあらわす	156
五	限定をあらわす	160
六	疑問をあらわす	161
七	感嘆をあらわす	165
八	語気詞の連用	167
第十一章 小品詞		
一	小品詞の概念	169
二	“所”と“所以”	169
三	“者”	170
四	“然”	171
五	“之”“焉”“而”	172
六	“等”“輩”“曹”“儕”“之類”“之属”	175
第十二章 文		
一	主語と述語の関係	177
二	主語の省略	179
三	倒置文	181
四	無主語文と無述語文	182
第十三章 述語		
一	述語の種類	186
二	動詞と目的語の関係	192
三	二重目的語	194
四	目的語の位置	197
五	複雑述語	200
第十四章 複文		
一	複文の概念と類別	214
二	連貫式	215
三	並列式	222
四	因果式	230
五	転折式	234
六	条件式	239
七	挿入文	242



## 編訳者前書

本冊は、二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」における日本漢字音・辞書・字書研究班の平成 17 年度研究報告書である。

当班の班長佐藤が二松学舎大学に着任したのは、本プログラムが二年目に入った平成 17 年度である。着任後、取りあえず本プログラムの研究目標を検討した結果、当班が早急に取り組まなくてはならない事業は「漢文訓読の語学的再検討」であろうとの認識を得た。言うまでもなく、日本漢文学の方法論的基盤は漢文訓読にあるからである。

訓読研究といえば、さかんに研究成果を積み上げてきた「訓点語研究」が国語学者によって支えられているところから分るように、訓読法の研究はすぐれて語学的な課題であるはずである。しかしながら、原文であるところの漢文（すなわち中国の古典語）を扱う中国語学の専家の視点でなされた研究は極めて少ない。まして漢文学習書となると、藤堂明保・近藤光男『中国古典の読み方』（江南書院、1956）が藤堂文法の体系（現代語の文法書『中国文法の研究』同、1956 がある）で説明したのものとして出色であったほか、散文小品アンソロジーも兼ねた小川環樹・西田太郎『漢文入門』（岩波書店・岩波全書、1957）が今でもよく利用される以外は絶えて見当たらない。ちなみに魚返善雄『漢文入門』（現代思想社・現代教養文庫、1966）があるが、これはエッセイとして楽しむべきものであろう。

藤堂の『読み方』は独自の有益な分析を含み、また文法の大枠を把握するには適したが、現実に多種多様の漢文を読もうとするにはきめの粗いところがあった。小川・西田の『入門』は教材の選択など総合的な読本としてはすぐれるが、学習方法としては大正時代から戦前にかけてのベストセラーであった塚本哲三『漢文解釈法』（有朋堂、1917）の枠内にあり、語学的な積極性には欠ける（なお塚本には先に有朋堂『國文解釈法』があり、のち 1960 年前後に『古文解釈法』として修訂再刊された。筆者はこれについて古文を学んだが、学習方法としては『漢文解釈法』より数等すぐれていた）。

一方、中国文学・中国哲学の専家による漢文学習書には数種のものがあったが、総じて「虚字」の説明と「句法」の説明とに終止し、ものによっては、中国語の文法と日本語の文法とが截然と区別されない説明が見られるものすらある。

国内書に満足し得なかった筆者が学生時代に中国古典の読み方を学んだのは、楊伯峻著・波多野太郎、香坂順一、宮田一郎訳『中国文語文法』（江南書院、1956）である。これは《文言語法》（北京大衆出版社、1955）が原書であり、さすがに文法の体系がきっちりしていた。俗に、漢文には文法など無い、などという暴論が発せられることもある世界にあって、やっと道しるべを見つけた思いであった。これによりつつ古典中国語を学び、筆者は中国古典研究に踏み出すことができたわけである。

しかし、邦訳『中国文語文法』には例文に訓読がついていないことのほか（必ずしも短所ではない）、原書の文法用語は原文のまま使うという特色があり（訳者らの意図であるという）、ために、語学書としては少しく一般性を欠き、学習書としても流布し得なかった。

ところで、原書《文言語法》は1963年に、例文を精選し、解説文をコンパクトに修訂した新書判の《文言文法》(中華書局)に姿を変えた。手元に架蔵の一本は1983年第三次印刷であり、文革中の空白を埋めるものとして歓迎された様子が分る。文法の体系・用語はさすがに時代の制約を逃れ得ないが、新書判200頁のボリュームに目配りの行き届いた記述が盛り込まれ、今なお魅力を失わない文法書である。

本冊は、漢文訓読法に中国語の文法体系から光をあてることによって、訓読を語学的にとらえようとする試みのために編んだものである。具体的には、《文言文法》(中華書局、1983)を邦訳し、ここに採録された例文約780例について訓読と口語訳をあたえ、さらにはその訓読がどういう配慮のもとになされたかを考察し紹介した(コラム「訓読処理」)。また、かつての邦訳『中国文語文法』は原書の文法用語を原文のまま使ったが、ここでは現在の我が国でふつうに行われる用語に翻訳した。

なお、従来の学習書はおおむね虚字の説明と句法の説明とに終止しており、「朝」はなぜ「あさ」と読まずに「あした」と読んできたか、「頭」はなぜ「あたま」と読まずに「こうべ」と読んできたか、「出」は「でる」ではなく「いず(づ)る」、「入」は「はいる」ではなく「いる」と読む理由はなにか、こうしたことがらには一向に答えてくれなかった。本冊はこのような疑問に答えるべく調査と記述をほどこした。この「なぜ」は学習者にとっては必ずしも必要な知識ではないが、教壇に立つ教員は、学生生徒の質問に明解に答えるべく承知しておきたいことがらだからである。「伝統的にこう読んできたのだ」というだけでは答えにならず、不信と漢文嫌いを助長するだけであろう。教職につくことが多い二松学舎大学の学生諸君には、是非このレベルまで習得していただきたいという微意に出るものである。

本冊「訓読処理」の記述にあたって、該当箇所に一々記載はしないが、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東大出版会、1963)、小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の國語史的研究』(東大出版会、1980)、山田俊雄・築島裕・小林芳規・白藤禮幸『新潮国語辞典』第二版(新潮社、1995)、北原保雄ほか『日本国語大辞典』第二版(小学館、2000-2002)、佐藤進・濱口富士雄『全訳・漢辞海』第二版(三省堂、2006)などを随時参照した。

楊伯峻(1909-1993)は解放後北京大学で後進を育て、《論語訳注》《孟子訳注》(ともに中華書局、1962)、《文言虚字》(中華書局、1965)、《春秋左伝注》(中華書局、1981)、《楊伯峻學術論文集》(岳麓書社、1984)ほかの著訳書を残した。《春秋左伝注》は小倉芳彦『春秋左氏伝』(岩波文庫、1988-1989)の底本となったほど定評のある注釈書である。

編訳の分担として、《文言文法》本文については全て本プログラム研究協力者・小方伴子が訳出し、「訓読処理」は佐藤が記述した。互いに原稿を交換しつつまとめ上げた成果であり、本冊の責任は両者が等分に担うべきものである。

2006年3月24日  
編訳者代表・佐藤 進